

ニラのネギアザミウマに対する殺虫剤の効果



写真1 ネギアザミウマ雌成虫



写真2 ネギアザミウマによる食害痕

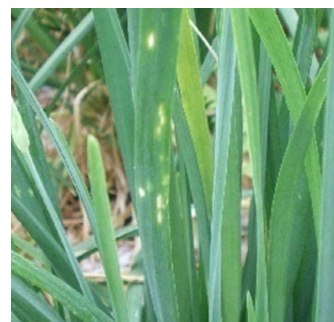


写真3 ニラえそ条斑病

表1 施設ニラに発生したネギアザミウマ2齢幼虫に対する各種殺虫剤の効果

IRAC ^{a)} コード	薬剤名	希釈倍率	供試個体群(採集地、年)					
			香南市 2019年	南国市岩村 2019年	南国市久礼田 2019年	須崎市 2019年	四万十町 2020年	南国市廿枝 2022年
1A	ランネート45DF	1,000倍	—	—	—	89.7	1.5	—
3A	アグロスリン乳剤	2,000倍	—	—	—	—	0	91.9
4A	ダントツ水溶剤	2,000倍	—	—	—	—	1.7	95.0
4A	モスピラン顆粒水溶剤	4,000倍	—	—	—	0	—	64.0
5	スピノエース顆粒水和剤	10,000倍	30.4	82.6	54.5	10.9	0	97.4
5	ディアナSC	2,500倍	87.0	65.2	86.4	17.9	0	100
14	リーフガード顆粒水和剤	1,500倍	52.2	65.2	54.5	0	0	19.1
21A	ハチハチ乳剤	1,000倍	56.5	87.0	59.1	0	2.9	100
34	ファインセーブフロアブル	2,000倍	—	—	—	—	—	100
	イオン交換水(対照)		23.3	23.3	26.7	18.8	8.1	7.3

注1) 数値は処理1日後の補正死虫率(%)を示す。ただし、須崎市の個体群の数値は処理2日後の補正死虫率(%)を示す。

2) イオン交換水(対照)の数値は死虫率(%)を示す。

3) —は調査を行っていないことを示す。

a) 殺虫剤の作用機構に基づく分類コード

県内の施設ニラでは、多くのほ場でネギアザミウマの発生が認められています(写真1)。本種は葉を直接加害するだけでなく、ニラえそ条斑病の原因であるアイリス黄斑ウイルス(IYSV)を媒介するため、発生を確認後は直ちに防除する必要があります(写真2、3)。しかし、近年、殺虫剤の防除効果の低下が疑われる事例が多数みられるようになり、防除に苦慮することが多くなっています。そこで、殺虫剤に対する感受性の実態を明らかにするため、県内6地点の施設ニラからネギアザミウマを採集し、殺虫剤の効果を調査しました。

その結果、全ての個体群を供試した4剤のうち、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSCおよびハチハチ乳剤の補正死虫率は0～97.4%以上と、個体群によって薬

剤感受性が大きく異なることが明らかになりました(表1)。また、須崎市と四万十町の個体群は、殺虫効果の低い薬剤が多かったことから、地域によっては有効薬剤が少なく、殺虫剤だけで防除することは難しくなっていると考えられました。

以上のように、ネギアザミウマの殺虫剤に対する感受性の低下が明らかになったことから、ネギアザミウマを防除するためには殺虫剤を用いた化学的防除法だけでなく、その他の防除法を組み合わせる必要があると考えられました。現在、ネギアザミウマに対する物理的・耕種的・生物的防除法を検討しており、今後、これらを組み合わせた総合的防除技術の確立に取り組んでいきます。

(昆虫担当 山脇美樹 088-863-4915)